

## 結社についてのわが思い 高山邦男

奥田亡羊さんが亡くなられた。あまりにも早い突然の訃報で呆然としている。仲間の中でいつも中心にいて、強い存在感がある男だった。通り一遍な言葉ながら、ご冥福をお祈りします。

今回は私の時評の最終回。一番皆様に伝えたい思いとして「結社」をテーマに選びました。ちよつと古い本なのですが『戦後短歌結社史』短歌新聞社（昭和五六年）という本があって、そこに掲載されている結社の数を数えてみたら約百七十にのぼります。なかなかの数です。小説とか詩の世界には同人誌とか文壇というものはあるようで、短歌や俳句のような結社という組織はないので、そこに短歌の特殊性や特徴があるのではないかと考えます。その辺りを紐解く道標として佐佐木幸綱が推奨してくれた大岡信著『うたげと孤心』の言葉を紹介します。

つまり、日本の古典詩歌の世界では、文芸は文芸、生活は生活という二元論でなく、文芸は生活、生活は文芸という一元論が、久しく原則をなしていたということができないのではないか。（中略）なぜ日本では茶道、書道、華道、香道などの芸道が、古い時代から現代にいたるまで、かくも多くの人々を組織的に惹きつけることができたのか。なぜ日本では短歌、俳句を作るのに「結社」というものがあり、弟子の作品を師匠が添削修正するという習慣が長年続いてきて不思議とされないでいるのか。指摘されてみると至極当然な疑問で、大岡はこの疑問を『うた

げと孤心』という本で考察しています。ここではそのあらすじを記すと、

ただ私は、日本の詩歌あるいはひろく文芸全般、さらには諸芸道にいたるまで、何らかのいちじるしい盛り上りを見せている時代や作品に眼をこらしてみると、そこには必ずある種の「合す」原理が強く働いていると思われることに、興味をそそられているのである。（中略）短詩型文学における「結社」組織をはじめ、おびただしい「同人雑誌」の存在は「結」とか「同」といった言葉に端的にみられるように、「合す」原理の脈々たる持続と健在ぶりを示しているといわねばなるまい。

そして「合す」という原理だけでいい作品が出来るわけではなく、「孤心」が必要とした上で、「不思議なことに、「孤心」だけにとじこもつてゆくと、作品はやはり色褪せた。」そして、「合す」意志と「孤心に還る」意志との間の戦闘的な緊張と牽引力が働いているかが重要と指摘する。今後、仮に短歌が紙媒体を離れたり、結社がインターネット上の集団になるという未来があったとしても、この原理は短詩型文学が生き残っていくために必須な原理になると確信しました。短歌人口が確実に減っている現状で何が未来につながっていくかと考えた時にこうした原理に立ち返ることは必須なことだと思えます。しかし、原理は原理として、実際に現実を動かしているのは人間です。黄金世代という言葉があるように人は刺激を受け合ったり競いあったりすることはまさに「合す」という理論そのものだと思います。そこにこそ結社が寄って立つ核心があり、未来があると思えます。奥田亡羊、今まででありがとう。さようなら。